

# すまいるたうん



第283号  
平成26年  
4月13日

## はい！東京新聞です 取材現場のつぶやき



「どこがフォルテシモで、どこがピアノシモなの？ この人の声が聞こえないんだから、どこがフォルテシモか、分かるように書かなくっちゃ」

何のことか意味不明ですよ。ある日、後輩記者の原稿をチェックしている時に、ふいに出た言葉です。

後輩への取材の指示や原稿の指導が日常業務の私ですが、未熟者です。今月、記者になって二十八年目に入りましたが、未だに、取材で大事なことを聞きそびれたり、原稿がうまく書けなかったりします。そんな私でも、後輩を指示したり叱ったりしなければなりません。

そんな、自分の口から出た後輩への指示や指導の言葉に、自分で「あ、そうか」と気づかされることがあります。冒頭の言葉に戻ります。どちらも音楽の楽譜に使う記号の名前で、フォルテシモは「非常に強く」、ピアノシモは「非常に弱く」です。注意した部下がピアノがうまいので、こんな例えをしました。

「原稿に登場する人のコメントが、だからだと長すぎて、どこが大事なポイント（フォルテシモ）かわかりにくい。コメントのどこを読者に伝えたいのか

を絞って、あまり大事じゃないこと（ピアノシモ）は削って、短く簡潔に書きなさい」。ちゃんとと言うと、そういう指導をしたわけです。ちよつと突拍子な例えで、後輩記者に伝わったかどうか分かりませんが、言った私自身が内心、「あ、これって、自分も守れていないな」と反省しました。

苦労して取材した相手のコメントは、全部書きたいと思いますが、限られた紙面では、大事なことに絞って書かなければなりません。

中身の濃い新聞をつくれるよう、日々、心がけたいと思います。

これとは別の日、別の後輩記者から、落語を知らないけど、興味がある、お勧めはありますか？ と質問されました。

私も落語好きといってもそれほど詳しくありませんが、「披露興行に行くといい。今、ちょうど春の真打ち披露興行をやっているよ」と教えました。

披露興行では、真打ちに昇任したり、伝統ある名前を襲名したりした、その日の主役の落語家（「主任」と言います）のほか、その人の師匠や、落語協会など所属団体の役員が多数、出演します。いわゆる大物落語家の嘶を、いちどに聞くことができるので、お勧めです。

私も先日の休みに、真打ち披露興行に行きました。新宿の鈴木演芸場で、その日の主任、つまり新しい真打ちは、桂やまどさんでした。

この方、荒川区西尾久のご出身です。西尾久保育園、尾久西小学校、荒川区立第七中、白鷗高校を経て、中央大学で心理学を専攻。認定心理士という資格を持つ、異色の経歴だそうです。ちなみに披露興行の口上では、師匠の桂才賀さんから、「そんな資格、（落語の世界では）屁のつかい棒にもなりませんかね」と、からかわれていました。

二ツ目時代は「桂才紫」という名前で、真打ち昇進を機に、三代目「桂やまど」を襲名しました。落語家には珍しいひらがなですが、八十九年ぶりに復活した、由緒ある名跡だそうです。

この日の披露興行で、やまとさんは、「妾馬（めかんま）」を披露しました。大名に見初められ、跡取りとなる男の子を生んだお鶴という女性の兄、八五郎が、お祝いの挨拶に訪れるという内容です。

やまとさんは三十九歳とまだ若いのに、お調子者の八五郎、八五郎に振り回される田中三太夫、どっしり落ち着いた大名・赤井御門守という、タイプの違う登場人物を、みごとに演じ分けました。

とてもよく通る声の持ち主で、これは落語家の武器になると思えました。荒川区出身の新しい真打ちがどう成長していくのか、楽しみです。

（東京新聞 社会部 部次長  
「前・したまち支局長」 榎本哲也）